

宇電懇ニュース

宇宙電波懇談会事務局発行
(名古屋大学空電研究所)

目次

- I. 宇電懇シンポジウム開催
- II. 第6回宇電懇運営委員会報告
- III. 第10回電波天文研究施設WG報告
- IV. 第11回電波天文研究施設WG報告
- V. 第12回電波天文研究施設WG報告
- VI. 第13回電波天文研究施設WG報告
- VII. NRO研究員公募
- VIII. 電波ヘリオグラフ建設準備室発足
- IX. 事務局からのお知らせとお願い

I. 宇電懇シンポジウム開催

サーキュラーNo. 2ですすでにお知らせしましたように今年度の宇電懇シンポジウムは下記のように開催されます。

1. テーマ: 「野辺山電波天文台」の構想と電波天文学将来計画
2. 会場: 野辺山宇宙電波観測所
3. 日程: 9h 12h 13h30m 15h 15h30m 17h 18h

12/16(水)		①	①	懇親会
12/17(木)	②	②	④	懇談会③
12/18(金)	④	(運営委員会)		

- ①「国立天文台」(仮称)と「野辺山電波天文台」(仮称)のありかた
- ②「野辺山電波天文台」の将来計画(数年~20年)
- ③電波天文の将来(10-20年後) -懇談会-
- ④各大学・機関・関連分野の将来計画
4. 世話人: 田原博人、海部宣男、小川英夫、柴崎清登
5. 申込メ切: 11月23日 宇電懇事務局まで

来年度より現在の東京天文台が改組され、緯度観測所などと合併して天文学の国立大学共同利用機関が設立されることになり、その大枠はすでにかたまっています。これに伴い、野辺山宇宙電波観測所、同太陽電波観測所、名古屋大学空電研究所太陽電波部門はまとまって野辺山電波天文台（仮称）を構成することになります。電波天文学における日本のセンターとなるわけであり、体制や運営に関してそのユーザーである宇電懇会員が十分議論する必要があります。同時に、電波天文学は将来を見通した新しい計画の立案・具体化の段階に入っており、スペースVLBIをはじめこれまで各方面で議論されてきた計画について総合的に検討し議論にのせたいと考えます。さらに各大学・機関での研究の展望を拡げ電波天文を発展させるのための議論、天文学の他の分野との関わりについての議論も重要です。旅費が厳しくて申し訳ありませんが、多くの方々が参加され、議論に加わられるようお願いいたします。

II. 第6回宇電懇運営委員会報告

日時 1987年10月19日18時25分～19時

場所 札幌市、北大・学術交流会館、第三会議室

出席者 田原博人、海部宣男、石黒正人、福井康雄、藤本光昭、小川英夫
鰐目信三、甲斐敬造、赤羽賢司

事務局報告

1. 宇電懇ニュース第75号発行 7月20日（発送7月24日）

会費納入依頼

2. 井口基金（宇電懇ニュース NO.75 IV. 参照）

3. 会員の移動（本ニュース IX. 参照）

議題1. 87年度宇電懇シンポジウムについて

テーマ：「野辺山電波天文台」の構想と電波天文学将来計画

世話人：柴崎、海部、小川、田原

日程：12月16日～18日

場所：NRO

他の分野との交流を考える必要がある → シンポジウムに INVITATION

光天連、電波研VLBI等

10月23日に世話人会を開催してプログラムの概要を決め、2-nd circularを11月初めに発送する予定。

名大A研から提案されていた「星間物質の物理と化学」については東北大学（高窪総研）と話し合った結果、PROTO STARに関する研究会とし、宇電懇とは別に開催することになった。（来年2月第1週頃開催予定）

議題2. 国立天文台設立と東京天文台改組の議論

（電波天文学研究施設検討WGメモ10～11配布）

改組準備調査委員会、電波天文学研究施設検討WG等の様子を宇電懇会員に知らせる必要がある。→宇電懇ニュースに載せる。

改組準備調査室で行ったアンケートの結果のうち、電波天文関係部分の抜粋をシンポジウムに間に合わせるよう準備室へ願います。

運営協議員、分野別専門委員、総合計画専門委員、研究交流専門委員等の選び方に関して宇電懇の意見を出す必要がある。直接選挙/推薦方法について具体的に決める必要がある。

Ⅲ. 第10回電波天文研究施設WG報告

日時：昭和62年7月29日14時～18時15分

場所：野辺山宇宙電波観測所輪講室

出席者：森本、海部、石黒、東条、甲斐、中島、塩見、鰐目、柴崎

議題1. 臨時事業/実験経費

すでに事務部に提出された。優先順位についてはまだ結論は出ていない。

(光学赤外望遠鏡が通れば、電波が1位?)

議題2. 技官問題

待遇改善関係

組織化の問題

文部省より案が出されたが、最近更に別の案が提案されている。その案は(部)課長制をねらっているので賛成できない。そうなればむしろ独立した技官組織を作らない方がよいのではないか。

議題3. 第I期完成時(7年)までの部門要求

初年度は新規要求は難しいので次年度に2部門要求する。

超長基線干渉計天体物理、サブミリ波天文学

その後さらに1部門要求するか、2部門要求するかの議論を行い、採決したところ、1部門：5名、2部門：1名、保留：2名となり、1部門(電波天文工学)のみを新規要求することにした。

議題4. 大学院教育

特定大学に客員部門を置く。63年度に東大より10の客員部門要求。64年度には、京都・名古屋・東北の各大学で希望している。

議題5. 全国の研究者の組織化

宇電懇が対応すればよい。会費を取っているのでは? 太陽関係(特にSOLAR-A)がカバーされない。

Ⅳ. 第11回電波天文学研究施設検討WG報告

日時：昭和62年9月9日15時15分～20時

場所：野辺山宇宙電波観測所輪講室

出席者：森本、海部、石黒、東条、平林、甲斐、中島、塩見、小杉、鰐目、柴崎

議題1. 技官組織(海部)

独立した技官組織(部課長制)

教官系技術者との関係（講師の助教授振替問題）

議題2. 大学院（鰐目）

総合研究大学院（岡崎方式）

客員講座（東大学際理学）・当面は、これで大学院教育を行う

議題3. 大型ミリ波アレイ（Large Millimeter Array）（石黒）

30素子。

議題4. space VLBI（平林）

ISAS/NRO。1994年打ち上げ予定。次期打ち上げロケット。

NROの役割分担。国際協力、運用、衛星開発、データ処理等。

議題3. 4. については宇電懇シンポジウムのテーマでもあり、次回のWG

で、シンポジウムの世話人を含めて合宿を行って十分議論する。その際サブミリについても議論する。

議題5. 組織と意志決定（甲斐）

電波天文運営専門委員会：討議事項、各種小委員会、構成、選出方法

野辺山電波天文台の運営：運営委員会、所員会議、各種小委員会

議題6. 宇電懇シンポジウム（提案）

日程の予定 12月16日（水）～18日（金）

場所 野辺山

テーマ 「野辺山電波天文台」の構想と電波天文将来計画

- ・「野辺山電波天文台」の構想

- ・電波天文の将来

- ・ミリ波アレイ

- ・space VLBI

- ・サブミリ波天文

今後このメモをERIDANUSの電子掲示板に掲示する。

このWGの名称は今後もそのまま電波天文学研究施設WGとする。

V. 第12回電波天文学研究施設検討WG報告

日時：昭和62年10月23日14時～23時

場所：湯沢館（海の口）

出席者：森本、海部、石黒、東条、平林、中島

塩見、小杉、甲斐、鰐目、柴崎、田原

議題1. space VLBI（平林）

IACGの様子

QUASAT ヨーロッパ主、アメリカは受信機のみ？

RADIO-ASTRON(USSR)1991～1994 実現性についてはまだ疑問あり

4周波数 327M、1.6、5、22GHz

国内3局 クリミア、ウラジオストック、スーファ

ココム問題 HIGH DENSITY TAPE

第2期計画 ミリ波 第3期計画 SPACE-SPACE

V SOP (日本 ISAS/NRO) 1994~95

3周波数 1.6、5、22GHz

打ち上げロケット M5 (現在使用中のM3S-2の2.5倍の能力)

固体ロケット NASDA OR ISAS 協議中

ISAS内体制 新部門(要求中) 超長距離通信部門

議題2. ミリ波アレイ(石黒) LMA (Large Millimeter Array)

NRO干渉計グループ内でミリ波干渉計による天文学の勉強会を実施中

火曜10h~12h 10/27、11/10、24、12/8

COSMOLOGY、HIGH Z GALAXY、系外銀河、STAR FORMING REGION、星、

太陽・太陽系

現有の干渉計の拡張にするか、根本的な改造(新設?)にするか。

素子数、周波数の数、実現時期等

230GHz OVRO 6素子計画はあきらめた

HATCREEK 6素子計画予算化

DYNAMIC RANGE を上げることが重要

サブミリ波干渉計 ハワイ

議題3. サブミリ波(海部)

サブミリ波~赤外(中~遠赤外) $500\mu\sim 10\mu$ SPACE OBS. が必須。

20年後のNROの主プロジェクト

サブミリ波~赤外の大口径望遠鏡を SPACE へ

VLBIはISASが中心

ミリ波 ARRAY (LMA)は10年以内に実現し、10年間活躍

今から準備が必要

ジェット機は制限が大きい→BALOON が現実的である。

WINDOW が広い、安い。2~3m望遠鏡

実験開発 中間赤外IRカメラ等

IMAGE, SPECTRUM の QUICK RESULT

ISASの赤外・BALOON、東大の施設、京大などのグループとの共同

研究。4~5年先に 1-ST FLIGHT。10年間 2~3回/年

米国にも3m BALOON 計画あり、国際協力も可。

議題4. 新研究所の体制

運営協議員、分野別専門委員、総合計画専門委員、研究交流専門委員等の外部委員の選出方法について。

研究者組織による推薦 研究者組織の定義 宇電懇、光天連等

現在組織のない分野はどうするか

NRO共同利用委員の外部委員は宇電懇運営

委員会で推薦し、観測所長が東京天文台教授

会に提案している。

直接選挙 研究班を組織する必要がある

被選挙権は?

VI. 第13回電波天文学研究施設検討WG報告

日時：昭和62年11月13日13時30分～17時40分

場所：野辺山宇宙電波観測所輪講室

出席者：森本、海部、石黒、東条、平林、中島、塩見、甲斐、鰐目、柴崎

議題1. VLBIの共同利用（提案：平林）

「NRO VLBI共同利用についての見解」NRO VLBIグループ提出

- ・既存のネットワーク（EVN、USN）に加入するメリットはあまりない。
- ・白田64mのVLBI利用について。共同利用研としてのISAS。
- ・NROでのVLBIはミリ波とSPACEである。
- ・45m鏡によるVLBI共同利用とは一体何か？
- ・次回に共同利用の具体的提案（ない場合はその根拠を示す）をする。

議題2. 電波ヘリオグラフ建設準備委員会（仮称）の発足（提案：鰐目）

- ・提案内容より、準備委員会ではなく準備室とする。
- ・構成員は野辺山太陽電波と豊川太陽電波とし、宇宙電波は（）とする。
- ・甲斐が第一回の召集者と成り、そこで委員長、幹事などを決める。（明日午前）

議題3. 野辺山電波天文台に於ける内部体制

資料：・新国立研と野辺山電波天文台の運営について

（11/11 NRO所員会議資料、海部）

- ・電波天文系運営組織・意志決定機構0次案（9/9 甲斐）
- ・昭和62年度野辺山宇宙電波観測所委員等
- ・所員会議資料第13回～16回

人事配置の具体案の検討、他の分野と人事配置の議論をする際の電波天文の代表者を推薦するためのメンバーを決定（森本、海部、甲斐、鰐目）。次回WGに代表者の推薦者名を提案してもらう。

所内の運営について：

- ・全職員による所員会議は継続（宇宙電波、太陽電波、豊川を含む）
- ・運営委員会を全体で一つにするか、太陽電波と宇宙電波で別々に作り必要なときに合同にするか、の議論を行った結果、全体で一つとし、必要に応じて別々の委員会を作ればよいということになった。

・内部組織（研究系主幹、観測所長、運営委員会、所員会議、各種委員会）についての今後の議論は

11/26 13h30mより 合同所員会議（宇宙電波、太陽電波、豊川）
15h30mより WG

（12/10 午後）

12/18（宇電懇シンポジウム・宇電懇運営委員会後）拡大WG

等で行う。

議題4. 名称について（電波天文学研究系＋野辺山宇宙電波観測所＋野辺山太陽電波観測所）を総称してどう呼ぶか。

英語の名称は「NRO（NOBEYAMA RADIO OBSERVATORY）」でよい。

日本語では「野辺山電波天文台」、「野辺山電波観測所」等が考えられる。

Ⅶ. 東京天文台野辺山宇宙電波観測所研究員公募（NROよりの掲載依頼）

昭和62年8月7日

東京天文台野辺山宇宙電波観測所では、下記の要領で研究員を募集します。

記

1. 研究分野 : 電波天文学および関連分野
2. 募集人員 : 1-2名
3. 任 期 : 2年以内、但し特別の事情のある場合共同利用委員会の議を経て、1年に限り延長を可とする。
4. 着任時期 : 昭和63年4月
5. 待 遇 : 研究員は、指導教官の下に研究を行うとともに、宇宙電波観測所の研究活動に参加する。なお、研究員在任中は教務補佐員として雇用され給与が支払われる。
6. 研究場所 : 原則として野辺山宇宙電波観測所とする。
7. 応募資格 : 大学院修士課程終了、またはそれと同等以上の者で当研究員に専任する者。
8. 提出書類 : 履歴書、研究計画書、論文リスト（共著である場合はその役割分担）、および主要論文の別刷り、希望の研究場所が野辺山でない場合は、その理由書。
9. 提出期限 : 昭和63年1月10日（日） 必着
10. 書類宛先および問い合わせ先 :

〒384-13 長野県南佐久郡南牧村野辺山
東京天文台野辺山宇宙電波観測所 森本雅樹
TEL: 0267-98-2831

Ⅷ. 電波ヘリオグラフ建設準備室発足

電波天文学研究施設WGでの議論を受け、11月14日に第1回準備室会議が開催され、委員長に甲斐、幹事に柴崎が選出されました。今後電波ヘリオグラフの建設にかかわる事項はこの準備室が担当していくことになります。メンバーは、野辺山太陽電波、豊川太陽電波の教官・技官で、必要に応じて宇宙電波から森本、石黒が加わるようになりました。

Ⅸ. 事務局からのお知らせとお願い

会員の移動：柴田一成 愛知教育大学 → The University of Texas at Austin
武市吉博 三菱電機(株) → 太洋無線(株)
高原まり子 東大理天文 → 東工大理物理
高羽 浩 名大理物理A研 → 電波研鹿島
徳丸宗利 電波研鹿島 → 電波研平磯
退会：村永孝次

宇電懇ニュース原稿募集：

宇電懇会員に知らせたいニュース、連絡事項、意見、近況、海外情報などを事務局までお寄せください。研究会等の案内や報告、それに各種ビジネスミーティングの報告も歓迎いたします。国立天文台、野辺山電波天文台等についての意見をどしどしお寄せ下さい。

宇宙電波懇談会事務局

代表 鰐目信三

秘書 柴崎清登

郵便振替口座

〒442 豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学空電研究所

TEL. 05338-6-3154(代)

05338-4-5711(FAX)

名古屋 4-42399 宇電懇事務局

東京天文台改組準備調査委員会報告
 - 改組の議論はどこまで進んだか -

文責 田原博人

東京天文台改組準備調査委員会は今まで下記の日程で7回開催された。改組の議論がどのように進んでいるか、その内容について紹介します。内容については、流動的なもの（現時点でどのようになっているか不確）や、議論が煮つまっていない部分は予想（このようになりそう）を入れてまとめました。いずれ宇電懇シンポを通じてより正確な情報がわかると思いますが、それらを踏まえ今後さらにきっちりした報告にまとめたいと考えています。なお概算要求は47億3千万円でしたが、文部省から大蔵省への要求は21億8千万となっているようである（文教速報から）。

第1回	62年	4月25日	第5回	7月25日
第2回		5月23日	第6回	9月19日
第3回		6月13日	第7回	11月21日
第4回		7月 4日	第8回	63年 1月16日（予定）

I 共同利用、部門要求関連

1. 共同利用（研究）に伴う項目

共同研究をどのように具体化できるかは、予算の獲得にかかっている。そのために次の要求が出されている。

○臨時事業費

開発的、基礎的な次の大テーマ4つを軸に、それぞれがいくつかの副テーマで構成される。

- ・電波観測限界拡大のための新技術の開発的研究（電波天文研究系）
5カ年計画、総額1億／年を要求
- ・遠宇宙観測用光学赤外システムの開発研究（光赤外研究系）
- ・精密宇宙計測のための技術開発研究（地球回転研究系）
- ・宇宙動的現象の精密観測とその解析（理論研究系）

○共同利用研究施設運営費

共同利用プロジェクトに要する装置の開発、製作、研究の実施、及び旅費に要する経費をまかなう。

2. 移行時期における部門

電波天文学研究系	6部門（新設1を含む）
光学赤外線天文学研究系	4
太陽物理研究系	2
位置天文・天体力学研究系	3
理論天文学研究系	2
地球回転研究系	5

3. 第1期完成時への部門要求

電波天文研究系	新設 2（電波天文工学ともう一部門） 振替・移行 1（恒星形成過程）
光学赤外研究系	新設 4 振替・移行 2

ハワイ観測所3部門（望遠鏡システム、宇宙大構造探査、極限天体観測）

ハワイ観測推進部門（光赤外計測、天体画像処理、光波干渉技術）

地球回転研究系	新設	1
	振替・移行	1
太陽物理研究系	新設	1 (太陽構造)
位置天文・天体力学研究系	新設	1 (銀河動力学)
理論研究系	新設	1
天文情報解析部門	新設	1

II 天文台内関連

1. 新研究所の名称

国立天文台と国立天文学研究所の2案があるが、宇宙科学研究所との違いを強調するためには今までになじんだ天文台の名称ということで、国立天文台が有力になった

2. 設置目的

「天文学及びそれに関連する分野の研究、並びに必要な事業の遂行」とするが、従来の設置目的を大きく変えることが困難な場合は、「天文学及びそれに関連する分野の研究、及び天象観測並びに歴書編成、中央標準時の決定及び現示並びに時計の検定に関する事務」とする。

3. 技術部

文部省は他の国立研究所と同様に独立した部課制をしうことを考えているようであるが、天文台としては技術部はおくか部課制（ピラミッド型）ではなく、並列したもの（複数煙突型）を考え、所属は現体制を維持する。待遇は「専門行政職」の導入を考えている。

4. 出版関係

東京天文台と緯度観測所の諸種の出版物を統一する

- ・英文のAnnalsとBulletinsを統合して英文紀要的なものにする
- ・台報や緯度観測所を統合して和文研究報告とし、別冊の年次報告は継続
- ・歴象年表・Time and Latitude Bulletinsはこれまで通り
- ・研究系独自の出版物は、出版委員会とは独立に

別刷代・投稿料の補助は継続、新しくプレプリントシリーズを発行。研究所主催の研究報告は、研究所の出版物として出す。広報委員会をつくり、研究所要覧と定期的ニュースを発行し、外部への広報活動を行う。

5. キャンパス問題

5ヶ年の施設長期計画書を作り概算要求をしていく。本格的な建物要求は63年度になるみこみ。

6. 停年について

60才が有力、緯度観測所（現在63才なので）については経過処置を考える。

III 大学院の教育

概算要求では東大内の客員大講座（東大学際理学）で教育を進める方向であったが、63年度は無理（2年先になりそう）と言うことになり、さしあたりは、現行と同じ併任方式で進める。

IV 各種委員会の選出と役割

1. 共同利用に関する委員会

(1) 評議会

人数：20名

選出方法：検討中（例えば運営協議員会と相談して、所長がきめる）

対象者：国立大学の学長その他学識経験者

任期：2年

開催頻度：年2回

(2)運営協議員会議

人数：21名 所内 11名

所外 10名

選出方法 台内 教授会で選出、所長が推薦

台外 これから検討

対象者：特に制限はない（助教授を含めないとはならないが、主として教授が対象）

任期：2年

開催頻度：2月に1回

運営協議員会議に人事委員会をおく。

具体的には煮つまっていないが、委員の数としては台内6+台外2名という案と台内3+台外2名との案があり、今後検討することになっている。

仮運営協議員会

早急（1月）に以下の様な内容で仮運営協議会を発足させる。

- ・台外委員（10名）：11月25日の天文研連で相談して候補（具体的な人名）出してもらい、所長が教授会と相談し決める。
- ・所内委員（11名）：選出に先立ち、教授の欠けている分野を考慮し、教授4名（現在の空き2名と来年4月の2名空き）のポストについて12月分野ごとに候補者を選び1月の教授会で決める。なお特別人事委員会を天文台内外の代表者を加え発足し、新研究所発足時の人事体制を議論する（1～2月）。これらは仮運営協議員会議で了承を受ける。
- ・今回の選定方法は臨時的なもので先例にならない。
- ・協議員会が発足したら改組準備調査委員会はそれに引き継ぐ

(3)各分野別専門委員会

4月1日から発足することは難しいが6月迄には発足したい。

人数：各専門委員会で異なると考えられる。例えば、

所内 5名（委員長）

所外 3-5

選出方法 台内 教授会で選出、運営協議員会に推薦

台外 これから検討

対象者：特に制限はない

任期：2年

開催頻度：年3回

(4)分野にまたがる専門委員会（総合計画、研究交流専門委員会）

この委員会の発足は専門委員会が発足した後になるのではないかな。

人数：台内 数名

台外 数名

選出方法：台内 教授会で選出、運営協議員会に推薦

台外 これから検討

対象者：特に制限はない

任期：2年

開催頻度：年3回

2. 委員の年齢制限の問題

評議会委員の年齢は原則として選出時70才以下、運営協議委員は65才以下という意見があったが、人によるので一概に言えないこと、年齢を明記するとそれ迄なら良いということになりかえって高令化するのではないか等の意見があり、とくに規程上は年齢制限は設けないとした。ただし必要に応じて申し合わせを作ってはどうかという意見が強かった。

3. 天文台内の委員会

(1) 教授会議

所長が召集し教授・助教授で構成する

2ヶ月に1回開催

審議事項：重要事項のみ審議し、幹事会議のチェック機能をもつ。

主幹・観測所長、部長、運営協議員、専門委員の推薦。人事委員会の選出。

(2) 幹事会議

運営や決定に至る手続きが複雑でなく権限が集中しない、という両面が生かされる工夫が必要ということで、以下の考えが有力。

教授会の常設委員会的なもので、主幹プラス4名程度の教授で構成。日常運営事項の振り分けを中心とし、審議事項は教授会全体で行う部分を多くする。

(3) 人事委員会

個別人事について、公募するかどう、分野をどのようにするか案を作成する

4. 台長の選出について

運営協議員会で討論、評議員会へ推薦し（原則として複数）、そこで決定する。

64才以下の国立天文台（仮称）及び国公立大学教授・教授経験者、各種研究機関の同等の職種の者から選出

任期：4年、再任の場合は2年で上限はとくにおかない。

発足時の所長選出

調査研究協力者会議（文部省内）が評議会の前身にあたるものを構成し、そこで所長を選出することになるようである。

5. 予想される人事の進め方（定常状態になった時の）

人事案件が発生

↓

運営協議会

↓

人事委員会（またはこれに相当する委員会）

公募にするかどうか、または分野をどうするかを決める

↓

公募

↓

運営委員会

人事選定委員会を設ける

↓

運営協議員会議で了承

追悼：鈴木博子さん

富山大学理学部 大石雅寿

1987年 11月 27日

11月22日の午後のことであった。11月初めに生まれた長男に対面するために、宮城にある妻の実家にいた私のもとに、野辺山から電話が入った。電話に出ると、観測所の坂本君が、「鈴木博子さんが、さきほど亡くなりました。」と言う。一瞬、自分の耳を疑った。前日に、名古屋大学での分子分光の実験を終え、笑顔で別れたばかりなのだから。とても信じられるような話ではないが、その後、続々と、井上さん、森本さん、春日さんから連絡が入り、次の日の朝一番の列車で野辺山に向かった。

野辺山に到着すると、皆、鎮痛な面持ち。本当のようだ。海部さんと一緒に清里に向かう。鈴木さんの家に入ると、博子さんは、静かに横たわっていた。やはり、動かせない事実であった。涙があふれてきた。聞くと、車を運転していて電柱に激突して即死だという。わずか、彼女の自宅から数百メートルの場所で、慣れた道で、いつもシートベルトをして運転する彼女が、ベルトをしていなかったために、運転しながら鍵を拾おうとしたために起きた事故であった。

私が鈴木さんと出会ったのは、1982年の8月のことであった。当時、私はD1、鈴木さんは京都大学の研修員をしていた。ちょうど45m望遠鏡の立ち上げ観測が始まった頃で、ラインサーベイを行って、（知識がなかったために）未同定線がザクザク出たと、喜んでいた時であった。その冬に、鈴木さんは、自らの炭素鎖生長理論を観測によって確かめるため、観測所の研究員として野辺山での活動を開始した。ラインデータの整約ソフトの開発など、鈴木さんは、計算機の人材としての能力を発揮し、野辺山の計算機システムは、鈴木OSにより運用・管理されることとなった。観測面においては、数年間は、なかなか成果が上がらなかったが、1986年から今年にかけて、 C_6H 、 CCS 、 C_3S 、cyclic C_3H という新星間分子を発見し、ラインサーベイ、星間化学の仕事が、ようやく結実し、これからさらに発展させよう、という時期の彼女の急逝であり、さぞかし、心残りであったと思う。

この世に残った我々は、鈴木さんの理論の正しさを人々に理解してもらい、さらに星間化学を発展させるため、一所懸命努力する決意である。さもなくば、鈴木さんのあのキンキンソプラノの声で「いったい、何やってんねん。」と言われそうである。合掌。